

熊本県導入指針

(持続性の高い農業生産方式の導入に関する指針)

第1 導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

1 普通作

水稲・麦・大豆における土づくりについては、稲ワラ、麦稈の土壌還元を基本として、堆きゅう肥の施用や緑肥栽培の導入等によって地力を維持・増進する。施肥については、側条施肥や緩効性肥料により施肥効率を高めることや、有機質肥料を使用することで化学肥料使用量の低減を図る。

化学農薬の使用量低減については、病虫害発生予察に基づいた適期防除による農薬使用量の低減を基本とするが、さらに低減を図るために生物農薬、フェロモン剤利用技術及び雑草防除技術等を導入する。

(1) 水稲

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安																											
有機質資材施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 たい肥等有機質資材施用技術（省令）（省令） <ol style="list-style-type: none"> ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 稲麦作付け体系の場合、稲ワラ、麦稈の全量、水稲単作の場合は、稲ワラ全量を鋤込む。稲ワラは土壌中の腐熟化を促進するため、秋冬期に2回以上の耕起を実施する。麦稈の施用田は還元状態を避けるため、水管理を徹底する。 2 緑肥作物利用技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中にレンゲ・ナタネ等の緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。鋤込み量に応じた基肥削減や適切な水管理など緑肥の適正利用を行う。 	堆きゅう肥 1.0 t/10a 以上 稲ワラ全量鋤込み (秋冬期耕起2回以上) 麦稈全量鋤込み 緑肥全量鋤込み (水稲移植14日以前)																											
化学肥料低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 基肥として側条施肥を導入。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による基肥重点の施肥を行う。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 	化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 コシヒカリ 6 (7) ヒノヒカリ他 7 (8) ミズホチカラ等 9 (10)																											
化学農薬低減技術	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="text-align: center;">導入する個別技術</th> <th style="text-align: center;">対象病虫害名</th> <th style="text-align: center;">削減回数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1 温湯種子消毒技術（省令）</td> <td>病害、線虫</td> <td>殺虫殺菌剤1回削減</td> </tr> <tr> <td>2 機械除草技術（省令）</td> <td>雑草</td> <td>除草剤1回削減</td> </tr> <tr> <td>3 除草用動物利用技術（省令） (アイガモ、コイの利用)</td> <td>害虫</td> <td>殺虫剤1回削減</td> </tr> <tr> <td>4 生物農薬利用技術（省令）</td> <td>雑草</td> <td>除草剤1回削減</td> </tr> <tr> <td>5 天然物質由来農薬利用技術（省令）</td> <td>病害</td> <td>殺菌剤1回削減</td> </tr> <tr> <td></td> <td>害虫</td> <td>殺虫剤1回削減</td> </tr> <tr> <td></td> <td>病害</td> <td>殺菌剤1回削減</td> </tr> <tr> <td>6 マルチ（紙マルチ）栽培技術（省令）</td> <td>雑草</td> <td>除草剤1回削減</td> </tr> </tbody> </table>	導入する個別技術	対象病虫害名	削減回数	1 温湯種子消毒技術（省令）	病害、線虫	殺虫殺菌剤1回削減	2 機械除草技術（省令）	雑草	除草剤1回削減	3 除草用動物利用技術（省令） (アイガモ、コイの利用)	害虫	殺虫剤1回削減	4 生物農薬利用技術（省令）	雑草	除草剤1回削減	5 天然物質由来農薬利用技術（省令）	病害	殺菌剤1回削減		害虫	殺虫剤1回削減		病害	殺菌剤1回削減	6 マルチ（紙マルチ）栽培技術（省令）	雑草	除草剤1回削減	
導入する個別技術	対象病虫害名	削減回数																											
1 温湯種子消毒技術（省令）	病害、線虫	殺虫殺菌剤1回削減																											
2 機械除草技術（省令）	雑草	除草剤1回削減																											
3 除草用動物利用技術（省令） (アイガモ、コイの利用)	害虫	殺虫剤1回削減																											
4 生物農薬利用技術（省令）	雑草	除草剤1回削減																											
5 天然物質由来農薬利用技術（省令）	病害	殺菌剤1回削減																											
	害虫	殺虫剤1回削減																											
	病害	殺菌剤1回削減																											
6 マルチ（紙マルチ）栽培技術（省令）	雑草	除草剤1回削減																											
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、「対象病虫害」が雑草の場合ほ場内の機械除草、害虫の場合ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 																												

(2) 麦

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 稲ワラ、麦稈の全量を鋤込む。稲ワラは土壌中の腐熟化を促進するため、麦の播種前に2回以上の耕起を実施する。	堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （ただし、作付け体系内における年間投入量） 稲ワラ全量鋤込み （作付け前耕起2回以上） 麦稈全量鋤込み	
化学肥料低減技術	1 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による基肥重点の施肥を行う。 2 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。	化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 大麦 5 (6) 小麦 8 (9) ミミカカリ等 9 (10)	
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	殺菌剤1回削減 除草剤1回削減 殺菌剤1回削減
	1 温湯種子消毒技術（省令） 2 機械除草技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令）	病害 雑草 病害	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(3) 大豆

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。	堆きゅう肥 1 t/10a 以上 （ただし、作付け体系内における年間投入量）	
化学肥料低減技術	1 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 2 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。	化学肥料由来窒素成分量 1. 4 kg/10a 以下 （1. 6 kg/10a 以下）	
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤1回削減 殺虫剤1回削減 殺虫剤1回削減 殺菌剤1回削減 殺虫剤1回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 フェロモン剤利用技術（省令）	雑草 ハスモンヨトウ 害虫 病害 ハスモンヨトウ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(4) ひえ、アワ、きび

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。	堆きゅう肥 2t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）	
化学肥料低減技術	1 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。	化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 ひえ 3.0 アワ 3.5 きび 3.5	
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令）	雑草 アワノメイガ アワノメイガ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 		

(5) とうもろこし（子実用）

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。	堆きゅう肥 2t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）	
化学肥料低減技術	1 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。	化学肥料由来窒素成分量 11kg/10a 以下	
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令）	雑草 アワノメイガ アワノメイガ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 		

(6) ソバ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。	堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）	
化学肥料低減技術	1 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥設計とする。	化学肥料由来窒素成分量 2. 1 kg/10a 以下	
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺線虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 天然物質由来農薬利用技術（省令）	雑草 ハゼンヨトウ 線虫類 ハゼンヨトウ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 		

(7) はとむぎ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。	堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）	
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥として側条施肥を導入。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。	化学肥料由来窒素成分量 1 0 kg/10a 以下 （1 2 kg/10a 以下）	
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令）	雑草 害虫 アワノメイガ アワノメイガ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、「対象病害虫」が雑草の場合ほ場内の機械除草、害虫の場合ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(8) ごま

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。	堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）	
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥として側条施肥を導入。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。	化学肥料由来窒素成分量 1 3 kg/10a 以下 （1 6 kg/10a 以下）	
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 天然物質由来農薬利用技術（省令）	雑草 アブラムシ類 斑点細菌病	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(9) えごま（子実用）

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。	堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）	
化学肥料低減技術	1 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。	化学肥料由来窒素成分量 3. 5 kg/10a 以下	
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令）	雑草 ベニフキノメイガ ベニフキノメイガ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 		

(10) なたね

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。	堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。	化学肥料由来窒素成分量 1 0 kg/10a 以下 （1 2 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名
	1 機械除草技術（省令）	雑草
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 	

(11) 飼料用稲

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 麦稈の鋤込み（省令） 麦稈の全量を鋤込む。麦稈の施用田は還元状態を避けるため、水管理を徹底する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中にレンゲ・ナタネ等の緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。	堆きゅう肥 1. 0 t/10a 以上 麦稈全量鋤込み 緑肥全量鋤込み （水稻移植 1 4 日以前）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥として側条施肥を導入。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による基肥重点の施肥を行う。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。	化学肥料由来窒素成分量 9 kg/10a 以下 （1 0 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名
	1 温湯種子消毒技術（省令） 2 機械除草技術（省令） 3 生物農薬利用技術（省令） 4 天然物質由来農薬利用技術（省令）	病害、線虫 雑草 害虫 病害 害虫 病害
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、「対象病害虫」が雑草の場合ほ場内の機械除草、害虫の場合ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 	

(12) 飼料用米

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 稲麦作付け体系の場合、稲ワラ、麦稈の全量、水稻単作の場合は、稲ワラ全量を鋤込む。稲ワラは土壌中の腐熟化を促進するため、秋冬期に2回以上の耕起を実施する。麦稈の施用田は還元状態を避けるため、水管理を徹底する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中にレンゲ・ナタネ等の緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。鋤込み量に応じた基肥削減や適切な水管理など緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 1.0t/10a以上 稲ワラ全量鋤込み (秋冬期耕起2回以上) 麦稈全量鋤込み 緑肥全量鋤込み (水稻移植14日以前)
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥として側条施肥を導入。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による基肥重点の施肥を行う。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 10kg/10a以下 (11kg/10a以下)
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	殺虫殺菌剤1回削減 除草剤1回削減 殺虫剤1回削減 殺菌剤1回削減 殺虫剤1回削減 殺菌剤1回削減
	1 温湯種子消毒技術（省令） 2 機械除草技術（省令） 3 生物農薬利用技術（省令） 4 天然物質由来農薬利用技術（省令）	病害、線虫 雑草 害虫 病害 害虫 病害	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、「対象病虫害」が雑草の場合ほ場内の機械除草、害虫の場合ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

2 野菜

野菜における土づくりについては、土壌診断を基本として、堆きゅう肥の施用や緑肥栽培の導入等によって地力を維持・増進する。

施肥については、局所施肥や緩効性肥料により施肥効率を高めることや、有機質肥料を使用することで化学肥料使用量の低減を図る。

化学農薬の使用量低減については、病虫害の発生消長に基づいて防除を行うことを基本とし、その際に天敵、フェロモン剤、対抗植物、被覆栽培、マルチ栽培及び機械除草技術を導入して低減を図る。

(13) トマト

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 （県独自技術） 4 灌水同時施肥技術（県）		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 促成長期 30(35) 促成 25(28) 夏秋雨よけ 21(24) 抑制加温 19(22) 抑制無加温 14(16)
化学農薬低減技術	導入する個別技術 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ① 抵抗性品種栽培技術 ② 台木利用技術 5 天然物質由来農薬利用技術（省令） 6 土壌還元消毒技術（省令） 7 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 8 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 黄色蛍光灯利用技術 ④ 紫外線除去フィルム利用技術 9 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 10 フェロモン剤利用技術（省令） （県独自技術） 11 マルハナバチ利用技術（県） 12 循環ファン利用技術（県）	対象病害虫名 コナジラミ 灰色かび病 コジラミ、ハメグリハエ、鱗翅目害虫、ネブセンチュウ 線虫類 土壌病害、線虫類、葉かび病 害虫 病害 土壌病害、線虫類 土壌病害、線虫類 コジラミ、ハメグリハエ、鱗翅目害虫 病害、コジラミ、ハメグリハエ、鱗翅目害虫 ハスモンヨトウ	殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 2 回以上削減 殺虫剤 3 回以上削減 殺線虫剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺菌剤 2 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 （別添一覧表） （別添一覧表）
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(14) ミニトマト

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 （県独自技術） 4 灌水同時施肥技術（県）		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 促成 25（28） 夏秋雨よけ 21（24） 抑制無加温 21（24）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ① 抵抗性品種栽培技術 ② 台木利用技術 5 天然物質由来農薬利用技術（省令） 6 土壌還元消毒技術（省令） 7 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 8 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 黄色蛍光灯利用技術 ④ 紫外線除去フィルム利用技術 9 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 10 フェロモン剤利用技術（省令）	コジラミ 灰色かび病、コジラミ、ハメグリハエ、鱗翅目害虫、ネオブセンチュウ 線虫類 土壌病害、線虫類、葉かび病、斑点病 害虫 病害 土壌病害、線虫類 土壌病害、線虫類 コジラミ、ハメグリハエ、鱗翅目害虫 病害、コジラミ、ハメグリハエ、鱗翅目害虫	
（県独自技術） 11 マルハナバチ利用技術（県） 12 循環ファン利用技術（県）	（別添一覧表）	（別添一覧表）	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(15) なす

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 （県独自技術） 4 灌水同時施肥技術（県）		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 促成 標準収量(15t 未満) 44 (50) 多収(15t 以上) 57 (65) 夏秋露地 35 (40) 早熟 32 (36) 抑制 28 (32)
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ① 台木利用技術 5 天然物質由来農薬利用技術（省令） 6 土壌還元消毒技術（省令） 7 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 8 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 黄色蛍光灯利用技術 9 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 10 フェロモン剤利用技術（省令）	コナジラミ、スリップス 灰色かび病、ハダニ、スリップス、鱗翅目害虫 線虫類 土壌病害、線虫類 害虫 病害 土壌病害、線虫類 土壌病害、線虫類 コナジラミ、スリップス、ハメグリハエ 病害、コナジラミ、ハメグリハエ、鱗翅目害虫 ハスモンヨトウ	
その他の留意事項	（県独自技術）		
	11 マルハナバチ利用技術（県） 12 循環ファン利用技術（県）	（別添一覧表）	（別添一覧表）
<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 			

(16) ピーマン

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 （県独自技術） 4 灌水同時施肥技術（県）		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 促成 35（40） 夏秋露地 26（30） 抑制 21（24）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ① 台木利用技術 5 天然物質由来農薬利用技術（省令） 6 土壌還元消毒技術（省令） 7 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 8 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 黄色蛍光灯利用技術 ④ 紫外線除去フィルム利用技術 9 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 10 フェロモン剤利用技術（省令）	コジラミ、スリップス スリップス、ハモンヨトウ 線虫類 土壌病害、線虫類 害虫 病害 土壌病害、線虫類 土壌病害、線虫類 コジラミ、スリップス 病害、コジラミ、 スリップス、鱗翅目害虫 ハモンヨトウ	
（県独自技術）	（別添一覧表）	（別添一覧表）	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(17) シシトウガラシ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 <p>（県独自技術）</p> <ol style="list-style-type: none"> 4 灌水同時施肥技術（県） 		<p>化学肥料由来窒素成分量 20 kg/10a 以下 （23 kg/10a 以下）</p>
化学農薬低減技術	<p style="text-align: center;">導入する個別技術</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 天然物質由来農薬利用技術（省令） 5 土壌還元消毒技術（省令） 6 熱利用土壌消毒技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 7 光利用技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 黄色蛍光灯利用技術 ④ 紫外線除去フィルム利用技術 8 被覆栽培技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 9 フェロモン剤利用技術（省令） 	<p style="text-align: center;">対象病虫害名</p> <p>コナジラミ スリップス、ハスモンヨトウ 線虫類 害虫 病害 線虫類 線虫類</p> <p>スリップス</p> <p>病害 害虫 ハスモンヨトウ</p>	<p>殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺線虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減</p> <p>殺虫剤 1 回削減</p> <p>殺菌剤 2 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減</p>
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(18) きゅうり

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 （県独自技術） 4 灌水同時施肥技術（県）		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 促成 28（32） 半促成 20（22） 夏秋雨よけ・高原露地 32（36） 抑制加温 20（22） 抑制無加温 20（22）
化学農薬低減技術	導入する個別技術 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ① 抵抗性品種栽培技術 ② 台木利用技術 5 天然物質由来農薬利用技術（省令） 6 土壌還元消毒技術（省令） 7 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 8 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 紫外線除去フィルム利用技術 9 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 10 フェロモン剤利用技術（省令） （県独自技術） 11 循環ファン利用技術（県）	対象病虫害名 コナジラミ、スリップス 灰色かび病、 ハダニ、スリップス 線虫類 病害、つる割病 害虫 病害 線虫類 線虫類 コナジラミ、スリップス、ハモグリバエ 病害 害虫 ハスモンヨトウ	殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 2 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺線虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 2 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 （別添一覧表）
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(19) にがうり

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 （県独自技術） 4 灌水同時施肥技術（県）		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 半促成 37（42） 夏秋 32（36）
化学農薬低減技術	導入する個別技術 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ① 台木利用技術 4 天然物質由来農薬利用技術（省令） 5 土壌還元消毒技術（省令） 6 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 7 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 紫外線除去フィルム利用技術 8 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 9 フェロモン剤利用技術（省令）	対象病虫害名 害虫 ハスモンヨトリ、オオタバコガ つる割病 害虫 病害 線虫類 線虫類 コナジラミ、スリップス、アブラムシ 病害 害虫 ハスモンヨトリ、オオタバコガ	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(20) かぼちゃ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 半促成 1 6（1 8） 早熟 1 3（1 4）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 天然物質由来農薬利用技術（省令） 5 土壌還元消毒技術（省令） 6 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 7 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 紫外線除去フィルム利用技術 8 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 9 マルチ栽培技術（省令）	害虫 雑草 ネオブセンチュウ 線虫類 害虫 病害 線虫類 線虫類 コジラミ、スリップス、アブラムシ 病害 コジラミ、アブラムシ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、「対象病虫害」が雑草の場合ほ場内の機械除草、害虫の場合ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(21) ズッキーニ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 1.5 kg/10a 以下 （1.7 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗性植物利用技術（省令） 4 天然物質由来農薬利用技術（省令） 5 土壌還元消毒技術（省令） 6 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 7 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 紫外線除去フィルム利用技術 8 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術	害虫 雑草 鱗翅目害虫 線虫類 害虫 病害 線虫類 線虫類 コシジラミ、スリップス、アブラムシ 病害 害虫	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、「対象病害虫」が雑草の場合ほ場内の機械除草、害虫の場合ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(22) すいか

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 Kg/10a 以下 促成・半促成 1 4（1 6） 抑制 1 4（1 6） 早熟 1 4（1 6） 小玉スイカ 1 0（1 1）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ① 台木利用技術 5 天然物質由来農薬利用技術（省令） 6 土壌還元消毒技術（省令） 7 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 8 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 紫外線除去フィルム利用技術（育苗） 9 被覆栽培技術（省令） ① トンネル栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 （県独自技術） 9 循環ファン利用技術（県）	コナジラミ、スリップス 鱗翅目害虫、アブラムシ類、ハダニ類 ネオブセンチュウ つる割病 害虫 病害 線虫類 線虫類 コナジラミ、スリップス、アブラムシ 病害 害虫	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(23) メロン

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 キンショウ・プリンス 12（14） ホームラン 7（8） アンデス・アムス 9（10） 赤肉半促成 9（10） アールス 11（12）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ① 抵抗性品種栽培技術 ② 台木利用技術 5 天然物質由来農薬利用技術（省令） 6 土壌還元消毒技術（省令） 7 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 8 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 紫外線除去フィルム利用技術（育苗） 9 被覆栽培技術（省令） ① 防虫ネット利用技術	コナジラミ、スリップス 鱗翅目害虫、コナジラミ類、ミミキアザミマ、アブラムシ類 ネオブセンチュウ 土壌病害 害虫 病害 線虫類 線虫類 コナジラミ、スリップス、ハモグリハエ 害虫	
（県独自技術）	10 循環ファン利用技術（県）	（別添一覧表）	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(24) いちご

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 （県独自技術） 4 灌水同時施肥技術（県）		化学肥料由来窒素成分量 1 7 kg/10a 以下 （1 9 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 土壌還元消毒技術（省令） 5 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 6 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 7 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術（育苗） ② 防虫ネット利用技術 8 フェロモン剤利用技術（省令） （県独自技術） 9 循環ファン利用技術（県） 10 高設育苗栽培技術（県）	スリップス 灰色かび病、うどんこ病、炭疽病、ハスモンヨトウ、ハダニ類、アブラムシ類、スリップス類 害虫 病害 線虫類 線虫類 スリップス 害虫 病害 ハスモンヨトウ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分や培土に含まれる有機物の状態を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・化学農薬使用量低減技術の被覆栽培技術は、施設開口部の防虫網設置と育苗期の雨よけ被覆とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(25) いんげん

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 促成 2 8（3 2） 半促成 2 3（2 6） トンネル早熟 1 6（1 8） 抑制・露地秋作 1 6（1 8）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺線虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 天然物質由来農薬利用技術（省令） 5 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 紫外線除去フィルム利用技術 6 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② トンネル栽培技術 ③ 防虫ネット利用技術 7 フェロモン剤利用技術（省令） 8 マルチ栽培技術（省令）	害虫 ハダニ 灰色かび病 ネオブセンチュウ 害虫 病虫害 スリップス、アブラムシ 病害 病害 害虫 ハスモンヨトウ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(26) そらまめ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 ハウス・トンネル 13（14） 露地 10（11）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 紫外線除去フィルム利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② トンネル栽培技術	雑草 ヨウムシ類 害虫 病害 アブラムシ 病害	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(27) エンドウ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 夏まきハウス 25（28） 秋まき 12（14）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 紫外線除去フィルム利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令）	雑草 シロイモシ、ヨトウ 害虫 病害 スリップス、アブラムシ 病害 害虫 ハスモンヨトウ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(28) スナップエンドウ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 20 kg/10a 以下 （23 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 紫外線除去フィルム利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令）	雑草 シロイモシ、ヨトウ 害虫 病害 スリップス、アブラムシ 病害 害虫 ハスモンヨトウ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(29) オクラ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 2.2 kg/10a 以下 （2.5 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺線虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 天然物質由来農薬利用技術（省令） 5 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 紫外線除去フィルム利用技術 6 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 7 マルチ栽培技術（省令）	害虫 鱗翅目害虫 ネオセンチュウ 害虫 病害 スリップス、アブラムシ 病害 アブラムシ、鱗翅目害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(30) スイートコーン

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 2.5 kg/10a 以下 （2.8 kg/10a 以内）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 黄色蛍光灯利用技術 ③ 紫外線除去フィルム利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 6 マルチ栽培技術（省令）	雑草 鱗翅目害虫 害虫 病害 アブラムシ 鱗翅目害虫 アブラムシ 病害 害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(31) ブロッコリー、カリフラワー

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 2 2 kg/10a 以下 （2 6 kg/10a 以内）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ① 抵抗性品種栽培技術 4 天然物質由来農薬利用技術（省令） 5 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 6 被覆栽培技術（省令） ① 防虫ネット利用技術 7 フェロモン剤利用技術（省令） 8 マルチ栽培技術（省令）	雑草 ハスモンヨトリ 病害 害虫 病害 アブラムシ 害虫 ハスモンヨトリ、コナガ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(32) キャベツ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 高原春まき 1.7 (1.9) 高原夏まき 1.7 (1.9) 平坦地夏まき 1.7 (1.9) 平坦地秋まき 1.7 (1.9)
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 3 回削減 殺虫剤 2 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ① 抵抗性品種栽培技術 4 天然物質由来農薬利用技術（省令） 5 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 6 被覆栽培技術（省令） ① 防虫ネット利用技術 7 フェロモン剤利用技術（省令）	雑草 軟腐病 鱗翅目害虫 病害 害虫 病害 アブラムシ コナガ、モンシロチョウ コナガ、オオタバコガ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(33) はくさい

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 春～秋まき 1.4 (1.6) 冬まき 1.8 (2.0)
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令）	雑草 軟腐病 鱗翅目害虫	除草剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減
	3 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ① 抵抗性品種栽培技術 4 天然物質由来農薬利用技術（省令）	根こぶ病 害虫 病害	土壌消毒剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減
	5 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術	アブラムシ	殺虫剤 1 回削減
	6 被覆栽培技術（省令） ① トンネル栽培技術 ② 防虫ネット利用技術	病害 コナガ、モンシロチョウ	殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 3 回削減
	7 フェロモン剤利用技術（省令） 8 マルチ栽培技術（省令）	コナガ、オオタバコガ 雑草	殺虫剤 2 回削減 除草剤 1 回削減
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(34) チンゲンサイ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 秋・冬まき 1 4（1 6） 春・夏まき 1 3（1 4）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ① 抗性品種栽培技術 4 天然物質由来農薬利用技術（省令） 5 土壌還元消毒技術（省令） 6 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 7 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 紫外線除去フィルム利用技術 8 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培利用技術 ② トンネル栽培技術 ③ 防虫ネット利用技術 9 フェロモン剤利用技術（省令）	害虫 コガ 病害 害虫 病害 線虫類 線虫類 害虫 病害 病害 害虫 ハスモンヨトウ、コガ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(35) コマツナ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 8 kg/10a 以下 （10 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ① 抵抗性品種栽培技術 4 天然物質由来農薬利用技術（省令） 5 土壌還元消毒技術（省令） 6 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 7 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 紫外線除去フィルム利用技術 8 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② トンネル栽培技術 ③ 防虫ネット利用技術 9 フェロモン剤利用技術（省令）	対象病害虫名 雑草 コガ 病害 害虫 病害 線虫類 線虫類、ハモグリハエ類 害虫 病害 病害 害虫 ハスモンヨトウ	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回以上削減 殺菌剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(36) タカナ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 1 4 kg/10a 以下 （1 6 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ① 防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令）	雑草 鱗翅目害虫 害虫 病害 アブラムシ 害虫 ハスモンヨトウ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(37) 阿蘇タカナ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 6 kg/10a 以下 （7 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺線虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 天然物質由来農薬利用技術（省令） 5 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術	雑草 鱗翅目害虫 線虫類 害虫 病害 アブラムシ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(38) ナバナ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 1.5 kg/10a 以下 （1.7 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ① 防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令）	雑草 鱗翅目害虫 害虫 病害 スリップス、アブラムシ 害虫 ハスモンヨトウ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(39) ノザワナ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 1.5 kg/10a 以下 （1.7 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ① 防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令）	雑草 鱗翅目害虫 害虫 病害 スリップス、アブラムシ 害虫 ヨウムシ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(40) クレソン

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 8 kg/10a 以下 （9 kg/10a 以内）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 紫外線除去フィルム利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令）	害虫 鱗翅目害虫 害虫 病害 アブラムシ 病害 害虫 コナガ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(41) ほうれんそう

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 平坦露地栽培 9月まき 8（10） 10月まき 14（16） 11月まき 18（20） 雨よけ栽培 14（16）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ① 抵抗性品種栽培技術 4 天然物質由来農薬利用技術（省令） 5 土壌還元消毒技術（省令） 6 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 7 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 紫外線除去フィルム利用技術 8 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 9 フェロモン剤利用技術（省令） 10 マルチ栽培技術（省令）	害虫 鱗翅目害虫 病害 害虫 病害 線虫等 線虫等 スリップス、アブラムシ 病害 害虫 ハスモンヨトウ 雑草	
（県独自技術）	（別添一覧表）	（別添一覧表）	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(42) レタス、非結球レタス

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 平坦地夏まき 1 4（1 6） 秋まき 年内穫り 1 4（1 6） 年明穫り 1 8（2 1）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 3 回以上削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺菌剤 2 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 黄色蛍光灯利用技術 ③ 紫外線除去フィルム利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② トンネル栽培技術 ③ 防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 7 マルチ栽培技術（省令）	害虫 鱗翅目害虫 害虫 病害 アブラムシ 鱗翅目害虫 アブラムシ 病害 細菌性病害 鱗翅目害虫 鱗翅目害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、害虫の場合ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(43) しゅんぎく

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 2.1 kg/10a 以下 （2.4 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 土壌還元消毒技術（省令） 5 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒 6 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 紫外線除去フィルム利用技術 7 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② トンネル栽培技術 ③ 防虫ネット利用技術 8 フェロモン剤利用技術（省令）	害虫 ハスモンヨトウ 害虫 病害 線虫類 線虫類、ハモグリバエ類 害虫 べと病、ハモグリバエ、アブラムシ類 ハスモンヨトウ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(44) パセリ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 2.8 kg/10a 以下 （3.2 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 土壌還元消毒技術（省令） 5 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 6 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 紫外線除去フィルム利用技術 7 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 8 フェロモン剤利用技術（省令） 9 マルチ栽培技術（省令）	害虫 ハスモンヨトウ 害虫 病害 ネオブセンチュウ ネオブセンチュウ アブラムシ 病害 虫害 ハスモンヨトウ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(45) セリ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 1 1 kg/10a 以下 （1 2 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 紫外線除去フィルム利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術	害虫 ハスモンヨトウ 害虫 病害 アブラムシ、スリップス 病害 害虫	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(46) アスパラガス

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 3 5 kg/10a 以下 (4 0 kg/10a 以下)
化学農薬低減技術	導入する個別技術		対象病害虫名
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 黄色蛍光灯利用技術 ④ 紫外線除去フィルム 5 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令）		害虫 ハスモンヨトウ 害虫 病害 害虫 病害 害虫 ハスモンヨトウ
	(県独自技術) 7 地表面残さ焼却技術（県）		(別添一覧表)
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(47) たまねぎ、葉たまねぎ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 早出し 1 3（1 4） 普通 1 4（1 6） 葉たまねぎ 1 3（1 4）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 2 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ① 防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 7 マルチ栽培技術（省令）	雑草 軟腐病 害虫 病害 スリップス 害虫 シロイモシヨトリ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(48) ねぎ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 葉ネギ、深ネギ 17（19） 小ネギ 18（20）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 土壌還元消毒技術（省令） 5 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 6 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 紫外線除去フィルム利用技術 7 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 8 フェロモン剤利用技術（省令） 9 マルチ栽培技術（省令）	害虫 シロイモノトウ 害虫 病害 線虫類 線虫類、ネグニ・コナダニ類 アブラムシ類、スリップス類、ハモグリバエ類 疫病、べと病等 害虫 鱗翅目害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(49) ワケギ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 2.1 kg/10a 以下 （2.4 kg/10a 以内）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 土壌還元消毒技術（省令） 5 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 6 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 紫外線除去フィルム利用技術 7 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 8 フェロモン剤利用技術（省令） 9 マルチ栽培技術（省令）	害虫 シロイモジヨトリ 害虫 病害 線虫類 線虫類、ネグニ・コナダニ類 アブラムシ類、スリップス類、ハモグリバエ類 病害 害虫 シロイモジヨトリ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(50) ニラ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 播種～1回目 25（28） 収穫2回目以降 3（3）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 土壌還元消毒技術（省令） 5 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 6 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 紫外線除去フィルム利用技術 7 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 8 マルチ栽培技術（省令）	害虫 ヨウムシ類 害虫 病害 線虫類 線虫類、ネグニ・コナダニ類 アブラムシ類、スリップス類、ハモグリバエ類 病害 害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(51) だいこん

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 高原 10 (11) 平地地 11 (12)
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺線虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ① 抵抗性品種栽培技術 5 天然物質由来農薬利用技術（省令） 6 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 7 被覆栽培技術（省令） ① トンネル栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 8 フェロモン剤利用技術（省令） 9 マルチ栽培技術（省令）	害虫 軟腐病 コナガ、アオムシ ネグサレセンチュウ 萎黄病 害虫 病害 害虫 病害 害虫 コナガ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(52) にんじん

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 夏まき 1 1 (1 2) 冬まき 1 1 (1 2)
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 天然物質由来農薬利用技術（省令） 5 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 6 被覆栽培技術（省令） ① トンネル栽培技術 7 フェロモン剤利用技術（省令） 8 マルチ栽培技術（省令）	害虫 ハスモンヨトリ 線虫類 害虫 病害 アブラムシ 病害 ハスモンヨトリ 雑草	
(県独自技術)	(別添一覧表)	(別添一覧表)	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(53) ごぼう

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 1 3 kg/10a 以下 （1 4 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺線虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 天然物質由来農薬利用技術（省令） 5 被覆栽培技術（省令） ① トンネル栽培技術 6 マルチ栽培技術	害虫 ハスモンヨトウ 線虫類 害虫 病害 病害 雑草	
(県独自技術)	(別添一覧表)	(別添一覧表)	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(54) さといも

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 ハウス・トンネル早掘り 1 3 (1 4) マルチ早掘り 1 4 (1 6) 普通掘り 1 3 (1 5)
化学農薬低減技術	導入する個別技術		対象病虫害名
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 天然物質由来農薬利用技術（省令） 5 被覆栽培技術（省令） ① トンネル栽培技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 7 マルチ栽培技術（省令）		
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(55) ヤーコン

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 8 kg/10a 以下 （9 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術		対象病虫害名
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 マルチ栽培技術（省令）		
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(56) ばれいしょ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 春バレイショ 1 4 (1 6) 秋バレイショ 1 1 (1 2)
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺線虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ① 抵抗性品種栽培技術 5 天然物質由来農薬利用技術（省令） 6 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 7 被覆栽培技術（省令） ① トンネル栽培技術 8 フェロモン剤利用技術（省令） 9 マルチ栽培技術（省令）	雑草 軟腐病 線虫類 病害 害虫 病害 アブラムシ 病害 ハスモンヨトウ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(57) かんしょ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 4 kg/10a 以下 （4 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ① 抵抗性品種栽培技術 5 天然物質由来農薬利用技術（省令） 6 フェロモン剤利用技術（省令） 7 マルチ栽培技術（省令）	害虫 ネオブセンチュウ コガネムシ幼虫 ネオブセンチュウ 線虫類 害虫 病害 ハスモンヨトリ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、「ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(58) レンコン

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する）
化学肥料低減技術	1 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 2 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 ハウス 1 4 (1 6) トンネル 1 8 (2 0)
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 5 フェロモン剤利用技術（省令）	害虫 ハスモンヨトリ 害虫 病害 病害 害虫 ハスモンヨトリ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、「ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(59) しょうが

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 ハウス・トンネル 20 (22) 露地 22 (26)
化学農薬低減技術	導入する個別技術		対象病害虫名
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 光利用技術（省令） ① 黄色蛍光灯利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 7 マルチ栽培技術（省令）		
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(60) ミョウガ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を削減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 4 kg/10a 以下 （5 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術		対象病害虫名
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 5 フェロモン剤利用技術（省令） 6 マルチ栽培技術（省令）		
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(61) コンニャク

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。	堆きゅう肥 2 t/10a 以上 (土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する)
化学肥料低減技術	1 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。	化学肥料由来窒素成分量 10 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名
	1 機械除草技術（省令） 2 対抗植物利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 マルチ栽培技術（省令）	雑草 線虫類 害虫 病害 雑草
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 	

(62) ナガイモ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。	堆きゅう肥 2 t/10a 以上 (土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する) 緑肥全量鋤込み (鋤込む時期に応じた生育量を確保する)
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。	化学肥料由来窒素成分量 28 kg/10a 以下 (32 kg/10a 以下)
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 天然物質由来農薬利用技術（省令） 5 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 7 マルチ栽培技術（省令）	雑草 シロイモシヨトリ 線虫類 害虫 病害 アブラムシ類 ハスモンヨトリ 雑草
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 	

(63) サンショウ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料低減技術	1 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 2 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 （成木園） 1 0 kg/10a 以下 （1 1 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 天然物質由来農薬利用技術（省令）	雑草 害虫 病害 雑草	
	3 マルチ栽培技術（省令）		
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(64) シソ (オオバ)

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術 (省令) ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg (成分) の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術 (省令) ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 (土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する) 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み (鋤込む時期に応じた生育量を確保する)
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術 (省令) 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術 (省令) 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術 (省令) 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 2.5 kg/10a 以下 (2.8 kg/10a 以下)
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 機械除草技術 (省令) 2 生物農薬利用技術 (省令) 3 天然物質由来農薬利用技術 (省令) 4 土壌還元消毒技術 (省令) 5 熱利用土壌消毒技術 (省令) ① 太陽熱利用土壌消毒技術 6 光利用技術 (省令) ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 黄色蛍光灯利用技術 ④ 紫外線除去フィルム利用技術 7 被覆栽培技術 (省令) ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 8 フェロモン剤利用技術 (省令) 9 マルチ栽培技術 (省令)	害虫 ハスモンヨトウ 害虫 病害 線虫類 線虫類 アブラムシ類 アブラムシ類 ハスモンヨトウ アブラムシ類 菌核病、斑点病、アブラムシ類、アザミヤカ類 ハスモンヨトウ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥 (牛ふん尿) の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の () 内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺 (畦畔) の機械除草を示す。 		

(65) えごま(葉)

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 5 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 5 マルチ栽培技術（省令）	雑草 ベニフキノミガ 害虫 病害 アブラムシ類 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(66) カブ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 2 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 1 2 kg/10a 以下 （1 3 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 天然物質由来農薬利用技術（省令） 5 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 6 被覆栽培技術（省令） ① トンネル栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 7 フェロモン剤利用技術（省令） 8 マルチ栽培技術（省令）	害虫 軟腐病、ハスモンヨトウ 線虫類 害虫 病害 害虫 病害 アブラムシ類、ハメグリハエ類 ハスモンヨトウ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(67) 茎ブロッコリー (スティックセニョール)

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術 (省令) ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg (成分) の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術 (省令) ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 (土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する) 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み (鋤込む時期に応じた生育量を確保する)
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術 (省令) 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術 (省令) 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術 (省令) 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 2.1 kg/10a 以下 (2.4 kg/10a 以下)
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減
	1 機械除草技術 (省令) 2 生物農薬利用技術 (省令) 3 天然物質由来農薬利用技術 (省令) 4 熱利用土壌消毒技術 (省令) ① 熱水・蒸気土壌消毒技術 5 光利用技術 (省令) ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 紫外線除去フィルム利用技術 6 被覆栽培技術 (省令) ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 7 フェロモン剤利用技術 (省令)	雑草 ハスモンヨトウ 害虫 病害 根こぶ病 アブラムシ類 アブラムシ類 アブラムシ類 ベと病 アブラムシ類、キジノミハムシ ハスモンヨトウ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥 (牛ふん尿) の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の () 内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(68) セルリー

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 2.8 kg/10a 以下 （3.2 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 土壌還元消毒技術（省令） 5 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 6 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 紫外線除去フィルム利用技術 7 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 8 フェロモン剤利用技術（省令） 9 マルチ栽培技術（省令）	害虫 ハスモンヨトリ 害虫 病害 萎黄病、線虫類 萎黄病、線虫類 アブラムシ類 ハモグリバエ類 ハモグリバエ類 葉枯病、斑点病等 アブラムシ類 ハスモンヨトリ、オオタバコガ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(69) トウガラシ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 1 1 kg/10a 以下 （1 2 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺線虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺線虫剤 1 回削減 殺線虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 2 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 天然物質由来農薬利用技術（省令） 5 土壌還元消毒技術（省令） 6 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 7 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 黄色蛍光灯利用技術 ④ 紫外線除去フィルム利用技術 8 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 9 フェロモン剤利用技術（省令）	コジラミ スリップス、ハスモンヨトウ 線虫類 害虫 病害 線虫類 線虫類 スリップス 葉枯病、斑点病 アブラムシ類、ハメグリバエ類 ハスモンヨトウ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、害虫の場合ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(70) にんにく

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 1 4 kg/10a 以下 （1 6 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 土壌還元消毒技術（省令） 5 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 6 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 7 フェロモン剤利用技術（省令） 8 マルチ栽培技術（省令）	害虫 ネグコガ 害虫 病害 紅色根腐病、線虫類 紅色根腐病、線虫類 アブラムシ類 ハスモンヨトウ、オタハコ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(71) ふき

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 ハウス促成 35（40） 露地 13（15）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 土壌還元消毒技術（省令） 5 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 6 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 7 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 8 フェロモン剤利用技術（省令）	害虫 ハスモンヨトウ 害虫 病害 白絹病 白絹病 アブラムシ類 葉枯病 アブラムシ類 ハスモンヨトウ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(72) ベビーリーフ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 2 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 4 kg/10a 以下 （4 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 2 回削減 殺虫剤 2 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 土壌還元消毒技術（省令） 5 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 6 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 黄色蛍光灯利用技術 ④ 紫外線除去フィルム利用技術 7 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術	害虫 鱗翅目害虫 害虫 病害 土壌病害 土壌病害 害虫 害虫 鱗翅目害虫 害虫 斑点性病害等 アブラムシ類、コガ等	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(73) ミズナ、ミブナ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 堆肥などの有機物と数 kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 17 kg/10a 以下 （20 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 2 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 土壌還元消毒技術（省令） 5 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 6 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 紫外線除去フィルム利用技術 7 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 8 フェロモン剤利用技術（省令） 9 マルチ栽培技術（省令）	害虫 ヨウムシ類 害虫 病害 立枯病等 立枯病等 アブラムシ類 ハメグリハエ類、アブラムシ類、 ハメグリハエ類、アブラムシ類 尻腐病、白さび病、 アブラムシ類、キスジノミハシ コナガ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(74) たけのこ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 (土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する)
化学肥料低減技術	1 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 18 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令）	雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 		

3 果樹

果樹における土づくりについては、土壌診断を基本として、堆きゅう肥の施用や稲ワラ等の敷料の土壌還元、草生栽培の導入等によって地力を維持・増進する。

施肥については、局所施肥や緩効性肥料により施肥効率を高めることや、有機質肥料を使用することで化学肥料使用量の低減を図る。

化学農薬の使用量低減については、病虫害発生予察に基づいて適期防除を行い、農薬の使用量を低減することを基本とするが、さらに低減を図るために天敵利用、フェロモン剤利用、被覆栽培、マルチ栽培技術および機械除草技術等を導入する。

(75) 温州みかん

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 (土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する)
	2 緑肥作物利用技術（省令） ① 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		草生全量土壌還元
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 高うね栽培等における根圏への施肥により施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 予想収量 3 t 14 (16) 4 t 17 (19) 5 t 19 (22)
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 3 回削減 殺虫剤 2 回削減 除草剤 2 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 6 マルチ栽培技術（省令）	雑草 カキリムシ ハダニ類、アブラムシ類、 うどんこ病 チャノキイロアザミウマ、カメムシ類 病害 害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(76) 中晩柑

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 高うね栽培等における根圏への施肥により施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 予想収量 2 t 17 (19) 3 t 18 (20) 4 t 20 (22) 5 t 22 (24)
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 3 回削減 殺虫剤 2 回削減 除草剤 2 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 6 マルチ栽培技術（省令）	雑草 カミキリムシ ハダニ類、アブラムシ類、 うどんこ病 チャノキイロアザミウマ、カミシ類 病害 害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(77) その他柑橘

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 高うね栽培等における根圏への施肥により施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 予想収量 3 t 15 (17) 4 t 20 (23)
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺菌剤 3 回削減 殺虫剤 2 回削減 除草剤 2 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 5 マルチ栽培技術（省令）	雑草 カミキリムシ ハダニ類、アブラムシ類、うどんこ病 病害 害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(78) キンカン

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 高うね栽培等における根圏への施肥により施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量（成木園） 1 4 kg/10a 以下 （1 6 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺菌剤 3 回削減 殺虫剤 2 回削減 除草剤 2 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 5 マルチ栽培技術（省令）	雑草 カミキリムシ ハダニ類、アブラムシ類、うどんこ病 病害 害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(79) なし

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 幸水・豊水 成木収量 3 t 16 (18) 新高・二十世紀 成木収量 5 t 20 (22)
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 2 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 光利用技術（省令） ① 黄色蛍光灯利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 袋かけ栽培技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 7 マルチ栽培技術（省令）	雑草 ハマキムシ類 害虫 病害 吸蛾類、カメムシ類 病害 害虫 鱗翅目害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(80) くり

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 （目標収量 0.4 t） 1 1 kg/10a 以下 （1.3 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術		除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令）	雑草	
	2 天然物質由来農薬利用技術（省令）	害虫 病害 雑草	
その他の留意事項	3 マルチ栽培技術（省令） ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。		

(81) ぶどう

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 （目標収量 1.3 t/10a） 6 kg/10a 以下 （6 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術		除草剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令）	雑草	
	2 生物農薬利用技術（省令）	灰色かび病	
	3 天然物質由来農薬利用技術（省令）	害虫 病害	
	4 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 袋かけ栽培技術	ハダニ類 病害	
	5 フェロモン剤利用技術（省令） 6 マルチ栽培技術（省令）	ハダニ類 雑草	
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。		

(82) キウイフルーツ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 （目標収量 2 t /10a） 1 0 kg/10a 以下 （1 0 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 5 フェロモン剤利用技術（省令） 6 マルチ栽培技術（省令）	雑草 チャウ目害虫 害虫 病害 病害 ハマキムシ類 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(83) ブルーベリー

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 6 kg/10a 以下 （7 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 5 マルチ栽培技術（省令）	雑草 コガネムシ幼虫 害虫 病害 病害 害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(84) かき

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 （目標収量 2.5） 1.6 kg/10a 以下 （1.8 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 防虫剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 光利用技術（省令） ① 黄色蛍光灯利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 7 マルチ栽培技術（省令）	雑草 カキハナムシ 害虫 病害 チャバネカミムシ 病害 害虫 ヒメコサシバ、チャハマキ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(85) もも、すもも

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 （目標収量 2 t） 8 kg/10a 以下 （10 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 光利用技術（省令） ① 黄色蛍光灯利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 7 マルチ栽培技術（省令）	雑草 モミシクイガ 害虫 病害 吸蛾類 病害 害虫 鱗翅目害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(86) うめ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 （目標収量 2 t） 1 3 kg/10a 以下 （1 4 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 フェロモン剤利用技術（省令） 5 マルチ栽培技術（省令）	雑草 ハマシ類、ケムシ類 害虫 病害 コスカシバ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(87) びわ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 1 4 kg/10a 以下 （1 6 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺菌剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 5 フェロモン剤利用技術（省令） 6 マルチ栽培技術（省令）	雑草 ハマシジキ類 害虫 病害 病害 害虫 鱗翅目害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(88) イチジク

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 5 kg/10a 以下 （6 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 1 回削減 殺線虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺菌剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 5 マルチ栽培技術（省令）	雑草 ネオブセンチュウ、 カミキリムシ 害虫 病害 病害 害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(89) マンゴー

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 1 4 kg/10a 以下 （1 6 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 被覆栽培技術（省令） ① 防虫ネット利用技術 5 マルチ栽培技術（省令）	雑草 スリップス、ハマキムシ類 灰色かび病 害虫 病害 害虫 雑草	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減 除草剤 1 回削減
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(90) オリーブ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 （目標収量 0.4 t） 1 1 kg/10a 以下 （1.3 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 天然物質由来農薬利用技術（省令） 3 光利用技術（省令） ① 黄色蛍光灯利用技術 4 マルチ栽培技術（省令）	雑草 害虫 病害 カメシ類、ゾウムシ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

4 花き

花きにおける土づくりについては、土壌診断を基本として、堆きゅう肥の施用や緑肥作物の栽培等によって地力を維持・増進する。

施肥については、局所施肥や緩効性肥料により施肥効率を高めることや、有機質肥料を使用することで化学肥料使用量の低減を図る。

化学農薬の使用量低減については、病害虫の発消長に基づいて防除を行うことを基本とし、その際に天敵利用、フェロモン剤利用、被覆栽培技術およびマルチ栽培技術等を導入して低減を図る。

(91)) カーネーション

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安	
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。		堆きゅう肥 2t/10a 以上 (土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する) 緑肥全量鋤込み (鋤込む時期に応じた生育量を確保する)	
	2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。			
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 冬春 42 (48) 夏秋 29 (34)	
	2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 (県独自技術) 4 灌水同時施肥技術（県）			
化学農薬低減技術	導入する個別技術		対象病害虫名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 土壌還元消毒技術（省令） 5 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 6 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 黄色蛍光灯利用技術 7 被覆栽培技術（省令） ① 防虫ネット利用技術 8 フェロモン剤利用技術（省令） 9 マルチ栽培技術（省令） (県独自技術)			害虫 ハダニ類 害虫 病害 線虫類 線虫類 スリップス スリップス 鱗翅目害虫 害虫 鱗翅目害虫 雑草
	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減			
	10 循環ファン利用技術（県）		(別添一覧表)	(別添一覧表)
	その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(92) きく

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 （県独自技術） 4 灌水同時施肥技術（県）		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 冬春 17（19） 夏秋 20（22）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 天然物質由来農薬利用技術（省令） 5 土壌還元消毒技術（省令） 6 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 7 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 黄色蛍光灯利用技術 8 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 9 フェロモン剤利用技術（省令） 10 マルチ栽培技術（省令）	雑草 鱗翅目害虫 ネグサレセンチュウ 害虫 病害 線虫類 線虫類 アブラムシ類等 白さび病他 鱗翅目害虫 ハスモンヨトウ 雑草	
県独自技術）	（別添一覧表）	（別添一覧表）	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(93) キンギョソウ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 （県独自技術） 4 灌水同時施肥技術（県）		化学肥料由来窒素成分量 1 8 kg/10a 以下 （2 0 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 土壌還元消毒技術（省令） 5 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 6 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 黄色蛍光灯利用技術 6 被覆栽培技術（省令） ① 防虫ネット利用技術 7 フェロモン剤利用技術（省令） 8 マルチ栽培技術（省令） （県独自技術） 9 循環ファン利用技術（県）	対象病虫害名 害虫 害虫 害虫 病害 病害 病害 アブラムシ アブラムシ 鱗翅目害虫 害虫 鱗翅目害虫 雑草 （別添一覧表）	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減 （別添一覧表）
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(94) 宿根かすみそう

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 （県独自技術） 4 灌水同時施肥技術（県）		化学肥料由来窒素成分量 1 1 kg/10a 以下 （1 3 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 土壌還元消毒技術（省令） 5 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 6 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 黄色蛍光灯利用技術 7 被覆栽培技術（省令） ① 防虫ネット利用技術 8 フェロモン剤利用技術（省令） 9 マルチ栽培技術（省令）	害虫 害虫 害虫 病害 線虫類 線虫類 アザミウマ、アブラムシ ハモグリバエ類 鱗翅目害虫 鱗翅目害虫 鱗翅目害虫 雑草	
（県独自技術）	10 循環ファン利用技術（県）	（別添一覧表）	（別添一覧表）
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(95) スターチス (シュクコンスターチス)

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術 (省令) ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術 (省令) ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 (土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する) 緑肥全量鋤込み (鋤込む時期に応じた生育量を確保する)
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術 (省令) 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術 (省令) 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術 (省令) 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 (県独自技術) 4 灌水同時施肥技術 (県)		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 スターチス 6 (7) シュクコンスターチス 28 (32)
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
1 機械除草技術 (省令) 2 生物農薬利用技術 (省令) 3 天然物質由来農薬利用技術 (省令) 4 土壌還元消毒技術 (省令) 5 熱利用土壌消毒技術 (省令) ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 6 光利用技術 (省令) ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 黄色蛍光灯利用技術 7 被覆栽培技術 (省令) ① 防虫ネット利用技術 8 フェロモン剤利用技術 (省令) 9 マルチ栽培技術 (省令) (県独自技術) 10 循環ファン利用技術 (県)	害虫 害虫 害虫 病害 線虫類 線虫類 アブラムシ アブラムシ 鱗翅目害虫 鱗翅目害虫 鱗翅目害虫 雑草	(別添一覧表)	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥 (牛ふん尿) の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の () 内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺 (畦畔) の機械除草を示す。 		

(96) ストック

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 1 6 kg/10a 以下 （1 8 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 土壌還元消毒技術（省令） 5 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 6 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 7 被覆栽培技術（省令） ① 防虫ネット利用技術 8 フェロモン剤利用技術（省令） 9 マルチ栽培技術（省令）	害虫 鱗翅目害虫 害虫 病害 病害 病害 アブラムシ アブラムシ 害虫 鱗翅目害虫 雑草	
（県独自技術）	（別添一覧表）	（別添一覧表）	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(97) デルフィニウム

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 1 4 kg/10a 以下 （1 6 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 土壌還元消毒技術（省令） 5 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 6 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 黄色蛍光灯利用技術 7 被覆栽培技術（省令） ① 防虫ネット利用技術 8 フェロモン剤利用技術（省令） 9 マルチ栽培技術（省令）	害虫 害虫 害虫 病害 線虫類 線虫類 アブラムシ アブラムシ 鱗翅目害虫 鱗翅目害虫 鱗翅目害虫 雑草	
（県独自技術）	（別添一覧表）	（別添一覧表）	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(98) トルコギキョウ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 （県独自技術） 4 灌水同時施肥技術（県）		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 年内早出し 1 4（1 6） 春出し 1 1（1 2） 無加温 1 1（1 2） 夏秋切り 1 4（1 6）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 天然物質由来農薬利用技術（省令） 5 土壌還元消毒技術（省令） 6 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 7 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 黄色蛍光灯利用技術 8 被覆栽培技術（省令） ① 防虫ネット利用技術 9 フェロモン剤利用技術（省令） 10 マルチ栽培技術（省令） （県独自技術） 11 循環ファン利用技術（県）	害虫 害虫 ネオブセンチュウ 害虫 病害 線虫類、土壌病害 線虫類、土壌病害 アブラムシ類 鱗翅目害虫 鱗翅目害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(99) バラ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。		堆きゅう肥 2t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 粗大有機物 乾物重 500kg/10a 以上
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 （県独自技術） 4 灌水同時施肥技術（県）		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 加温式土耕栽培 35（40） ロックウール耕 NO ₃ -N、NH ₄ -N 成分の 合計 6.6me 以下
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 土壌還元消毒技術（省令） 5 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 6 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 黄色蛍光灯利用技術 7 被覆栽培技術（省令） ① 防虫ネット利用技術 8 フェロモン剤利用技術 9 マルチ栽培技術（省令） （県独自技術） 10 循環ファン利用技術（県）	害虫 根頭がんしゅ病 害虫 病害 線虫類 線虫類 アザミウマ、アブラムシ ハスモンヨトウ ハスモンヨトウ 害虫 ハスモンヨトウ 雑草 （別添一覧表）	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(100) ゆり

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 オリエンタル 1 1 (1 2) スカシユリ 1 1 (1 2) テッポウユリ 1 1 (1 2) シテッポウユリ 2 7 (3 1)
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 土壌還元消毒技術（省令） 5 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 6 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 7 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 8 マルチ栽培技術（省令）	害虫 害虫 害虫 病害 線虫類 線虫類 アブラムシ アブラムシ 害虫、病害 雑草	
その他の留意事項	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。		

(101) グラジオラス

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a 以下 切り花 14 (16) 球根養成 18 (20)
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 温湯種子消毒技術（省令） 2 機械除草技術（省令） 3 生物農薬利用技術（省令） 4 対抗植物利用技術（省令） 5 天然物質由来農薬利用技術（省令） 6 土壌還元消毒技術（省令） 7 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 8 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 9 フェロモン剤利用技術 10 マルチ栽培技術（省令）	ネダニ類 害虫 害虫 線虫類 害虫 病害 病害 病害 アザミマ アザミマ シロイモジヨトリ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(102) レザーリーフファン

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する）
化学肥料低減技術	1 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 2 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 1 1 kg/10a 以下 (1 3 kg/10a 以下)
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 土壌還元消毒技術（省令） 5 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 6 被覆栽培技術（省令） ① 防虫ネット利用技術 7 マルチ栽培技術（省令）	害虫 害虫 害虫 病害 病害 病害 害虫 害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(103) ガーベラ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 （県独自技術） 4 灌水同時施肥技術（県）		化学肥料由来窒素成分量 20 kg/10a 以下 （23 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 土壌還元消毒技術（省令） 5 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 6 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 黄色蛍光灯利用技術 7 被覆栽培技術（省令） ① 防虫ネット利用技術 8 フェロモン剤利用技術 9 マルチ栽培技術（省令）	害虫 害虫 害虫 病害 線虫類 線虫類 アザミマ、コジラミ 害虫 害虫 害虫 ハスモンヨトウ 雑草	
県独自技術）	10 循環ファン利用技術（県）	（別添一覧表）	（別添一覧表）
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(104) りんどう

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 1 4 kg/10a 以下 （1 6 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 土壌消毒剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 2 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 土壌還元消毒技術（省令） 7 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 5 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 6 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 7 マルチ栽培技術（省令）	害虫 害虫 害虫 病害 病害 病害 アザミヤ アザミヤ 病害 害虫 害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(105) シクラメン

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 鉢土については、窒素等の成分内容の明らかなもので、良質有機物を十分に含むものを使用する。		鉢土 ・窒素等の成分分析値が明らかであるもの。 ・良質有機物を2割以上含むもの。
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		鉢土・施設の外に施肥の影響がないようにする。
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 熱水・蒸気土壌消毒技術 5 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 黄色蛍光灯利用技術 6 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術	害虫 ハダニ類 害虫 病害 線虫類 アザミヤ アザミヤ 鱗翅目害虫 病害 害虫	
	県独自技術）		
	8 循環ファン利用技術（県）	（別添一覧表）	
その他の留意事項	・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。		

(106) ホオズキ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 1 4 kg/10a 以下 （1 6 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 天然物質由来農薬利用技術（省令） 5 土壌還元消毒技術（省令） 6 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 7 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 黄色蛍光灯利用技術 8 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 9 フェロモン剤利用技術（省令） 10 マルチ栽培技術（省令）	害虫 害虫 ネグセンチュウ 害虫 病害 線虫類 線虫類 アザミウマ アブラムシ類、鱗翅目害虫 アブラムシ類、鱗翅目害虫 病害 害虫 オオタバコガ 雑草	
（県独自技術） 11 マルハナバチ利用技術（県） 12 循環ファン利用技術（県）	（別添一覧表）	（別添一覧表）	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(107) ブバルディア

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 （県独自技術） 4 灌水同時施肥技術（県）		化学肥料由来窒素成分量 1 6 kg/10a 以下 （1 8 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 天然物質由来農薬利用技術（省令） 5 土壌還元消毒技術（省令） 6 熱利用土壌消毒技術（省令） ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 7 光利用技術（省令） ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 8 被覆栽培技術（省令） ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 9 フェロモン剤利用技術（省令） 10 マルチ栽培技術（省令） （県独自技術） 11 循環ファン利用技術（県）	害虫 害虫 ネオブセンチュウ 害虫 病害 線虫類 線虫類 アザミウマ、アブラムシ アザミウマ、アブラムシ 病害 害虫 オオタバコガ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

5 工芸作物
(108) 茶

茶における土づくりは、土壌診断に基づいた肥培管理の徹底を基本として、堆きゅう肥の施用や稲ワラ、野草等の粗大有機物の投入によって地力を維持・増進する。

施肥については、灌注施肥による局所施肥や肥効調節型肥料、有機質肥料の利用によって化学肥料使用量の削減を図る。

化学農薬の使用量低減については、病虫害発生予察に基づいた適期防除を行うことを基本とし、さらに低減を図るために天敵やフェロモン剤利用による防除技術を導入する。

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。		堆きゅう肥 2t/10a 以上 (土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する) 粗大有機物 乾物重 500kg/10a 以上
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術（省令） 灌注施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 3.9 kg/10a 以下 (4.5 kg/10a 以下)
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 天然物質由来農薬利用技術（省令） 4 光利用技術（省令） ① 黄色蛍光灯利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ①防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 7 マルチ栽培技術（省令）	害虫 鱗翅目害虫 害虫 病害 鱗翅目害虫 害虫 鱗翅目害虫 雑草	
	(県独自技術) 8 浅刈整枝技術（県） (深刈整枝技術)	(別添一覧表)	(別添一覧表)
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(109) 食用桑(葉)

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術(省令) ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術(省令) ① 草生利用による有機物還元(省令) 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 1 t/10a 以上 (土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する) 草生全量土壌還元
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術(省令) 灌注施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術(省令) 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術(省令) 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 2.3 kg/10a 以下 (2.7 kg/10a 以下)
化学農薬低減技術	導入する個別技術		対象病害虫名
	1 機械除草技術(省令) 2 天然物質由来農薬利用技術(省令)	雑草 害虫	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥(牛ふん尿)の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料低減技術」の()内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺(畦畔)の機械除草を示す。 		

(110) いぐさ

いぐさにおける土づくりについては、作土深の確保や透水性の改良など土壌物理性の改善と輪作体系を基本として、堆きゅう肥の施用や稲ワラの還元、緑肥栽培の導入等によって地力を維持・増進する。施肥については、肥効調節型肥料や有機質肥料の利用によって化学肥料施用量の削減を図る。化学農薬の使用量低減については、深水栽培技術の導入によって殺虫剤使用量の削減を行う。

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術（省令） ① 堆きゅう肥等の投入 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 ② 稲ワラ・麦稈の鋤込み 稲ワラ全量を鋤込む。稲ワラは土壌中の腐熟化を促進するため、いぐさ移植前に2回以上の耕起を実施するか、または還元状態を避けるため、排水溝等を設置して水管理を徹底する。 2 緑肥作物利用技術（省令） ① 緑肥作物の鋤込み 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 1 t/10a 以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ全量鋤込み 緑肥全量鋤込み
化学肥料低減技術	1 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 2 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 3.4 kg/10a 以下 （3.9 kg/10a 以下）
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	殺虫剤 1 回削減
	（県独自技術） 1 深水栽培技術（県）	イグサシムシガ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・十分な作土深を確保するとともに、土壌の排水性改善に留意する。 ・「化学肥料低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

第2 持続性の高い農業生産方式の導入の促進を図るための措置に関する事項

1 土壌診断の実施

土づくりに基づいた持続性の高い農業を導入するうえで、土壌診断結果に基づいた堆きゅう肥などの有機質資材の施用及び化学肥料の使用量低減が不可欠である。

このため、各農業普及・振興課においては土壌診断室を整備し、農業者の依頼に応えることができる体制が整っている。また、農協の営農センター等の土壌診断施設においても農業普及・振興課との連携を図りつつ、土壌診断を行う体制が整備されてきている。

このため、持続性の高い農業生産方式の導入を図る農業者においては、このような土壌診断体制の積極的な活用を図るとともに、有機物資材の種類や施用量の決定等に関し、普及指導員や農協営農指導員から土壌診断結果や使用する資材の分析データを基にしたアドバイスをうけ、科学的な土づくりによる地力の増進と施肥の合理化に努めることとする。

2 合理的な施肥の実践

局所施肥や肥効調節型肥料、有機質肥料の使用にあたっては、施肥法や肥料の特徴を正しく理解するとともに、地域の気象条件、対象作物の吸肥特性に合った資材の選択と施肥量・施肥時期の決定を行う必要がある。

持続性の高い農業生産方式の導入を図る農業者においては、地域の耕種基準を参考とするとともに農業普及・振興課や農協等を通してこれらの情報を十分に活用し、作物の収量・品質レベルを低下させることがないような合理的施肥を実践することが必要である。

3 発生予察に基づく確な防除の実施

持続性の高い農業生産方式の円滑な実施のためには、農業者自らが要防除水準を適切に設定できるよう病害虫防除所等から精度の高い予察情報の提供が前提となる。このためには予察精度をさらに向上させるとともに、これらの情報が迅速かつ的確に伝達されるような体制を整備する必要がある。

持続性の高い農業生産方式の導入を図る農業者においては、このような発生予察情報を有効に活用するとともに、病害虫の発生消長に基づく生物農薬等による効果的な防除の実施に関しては、普及指導員、病害虫防除所職員等による巡回指導を活用するなどして、導入時期等の適切なアドバイスを受けることが重要である。

エコファーマー認定において熊本県が独自に認める技術の対象病害虫、使用の目安

導入する個別技術	対象病害虫	使用の目安
深水栽培技術	イグサシンムシガ	殺虫剤 1 回削減
マルハナバチ利用技術		植物成長調整剤 5 回削減
移植栽培技術	雑草、土壌病原菌	土壌消毒剤 1 回削減
循環ファン利用技術	灰色かび病、葉かび病	殺菌剤 1 回削減
浅刈整枝技術 (深刈整枝技術)	炭そ病、チャノミドリヒメヨコバイ、 チャノキイロアザミウマ	殺菌剤 1 回以上削減 殺虫剤 1 回以上削減
高設育苗栽培技術	炭そ病	殺菌剤 1 回削減
地表面残さ焼却技術	斑点病、茎枯病	殺菌剤 1 回削減
作付前湛水技術	線虫類	殺線虫剤 1 回削減